

日本舞踊 『禍神』『徒用心』公演

先般、土曜講座にて、著名な日本舞踊家である藤間蘭黄氏にお話を伺った。また、後日浅草公会堂にて行われた、氏による公演『日本舞踊の可能性 vol.3』を鑑賞した。

日本舞踊講義

日本舞踊とは、一言でいうと歌舞伎から踊りが独立したものだ。舞台上で観客に踊って見せる点で、盆踊りなどの伝承芸能とは一線を画すが、一方で、それらに深く影響を受けている。

元々、日本舞踊は歌舞伎の中の踊りである。よって、歌舞伎の歴史を紐解くと、日本舞踊がいかなるものかを想像しやすい。江戸時代初期、出雲阿国により歌舞伎踊りが誕生した。それは、当時伝来してあった三味線の音色に合わせて、女性たちが踊るものだった。男装した1人の女性が、恋人役の、遊女や花魁の格好をしたもう1人の元に行くのを、観客たちは囃し立てて楽しんだ。しかし、女性ばかりの芸能集団であったため、売春や役者を巡って争いが起き、しまいには、風紀を乱すとして幕府に禁止された。

しかし、民衆は再び歌舞伎を欲した。そこで次に始まったのが、若衆歌舞伎だ。今でいう男性アイドルに似ており、顔立ちの良い未成年の男子を集めて女装させ、歌舞伎踊りと同じよう

なことをさせた。それは非常に人気を博したが、当時は若い男も買春の対象であったため、歌舞伎踊りと同じく禁止された。

一方で幕府は、成人男性による歴史上の人物の物語や、ホームドラマの公演までは禁止しなかった。つまり、踊りは禁じなかった。つまり、踊りは禁じなかった。劇には許可を与えたのである。

そうして生まれたのが、現在の歌舞伎に最も近い、野郎歌舞伎だ。当初は男役のみでの演目しか無かったが、段々男役のみでは成立しない演目も出てきた。そこで生まれたのが、世界的にも珍しい、女形という演技技法である。そして、女形が洗練される中で、台詞を言うだけだけでなく、踊って欲しいという声がかかるようになる。これに応えつつ、禁制を逃れるため、長い劇中のワンシーンをわざと踊りにして見せたのが、女形の踊りの始まりである。後に女形は、1日中行われる歌舞伎の息抜きとして使われるようになった。

やがて、踊りに特化した役者も現れてきた。踊りへの禁止も形骸化した。観客役者双方が、多種多様な演目、役を求めた。ここに、1人の役者が何役をも演じる、変化舞踊が生まれたのである。これが歌舞伎から独立したものが、明治に入り、『日本舞踊』と呼ばれ始めるのである。

歌舞伎、能、雅楽、神楽。それらのエッセンスが詰まった日本舞踊は、古代から現代までの芸能の集大成とも言えるだろう。『コロナ禍の舞台公演』

演目は、『禍神』『徒用心』の2つ。いずれも、海外の演劇作品を、藤間氏が日本舞踊の形に仕立て直したものだ。

『禍神』は、ゲーテによる『ファウスト』が元となっている。『ファウスト』に登場する悪魔メフィストを、日本古来の災いをなす神、禍神になぞらえ、それを主人公として、ファウスト博士との掛け合いに主に焦点をあてることで話が展開される。

そして、特筆すべきは、先述の2人を始めとした様々な登場人物を、なんと藤間氏独りで演じられたということだ。

『徒用心』は、オペラ、『セビリアの理髪師』を原典としており、後見人である老人に監禁され、結婚を強制されようとしている娘を若殿が救い出し、2人は結ばれる、という恋愛譚である。老人も娘を奪われまいと様々な用心をするのだが、若い愛の力の前には無力、つまり、その用心は「徒なる用心」なのだ、と閉じられる。5人の女性舞踊家の方々が演じられた。

公演は、圧巻であった。重厚なセットの無い、広々とした舞台を、伸び伸びと躍動感をもって動き回り、細々とした所作や仕草を織り交ぜ、観客にストーリーを伝えていく。しかし、それは単に舞踊を通じた一方的主張ではなく、観衆に、何もない空間から、意図する所を汲み取

らせる投げ掛けだと言える。そして、その投げ掛けは、言うまでもなく、演者の方々の凄まじい表現力があつて初めて成功するものだ。

演技力もさることながら、西洋歌劇を日本舞踊に纏め上げる、藤間氏の技量も見落とせない。

『ファウスト』は長大な戯曲であるが、『禍神』はたった30分程の長さしかない。僅かな時間にエッセンスを詰め込み、高い完成度に落とし込む氏の力は、まさに驚異的だ。

その藤間蘭黄氏は、今年の秋の叙勲で、紫綬褒章を受章されたそうである。日本舞踊の大きな可能性、それを強く意識させられる受章ではないだろうか。(たきや・リコリス)

藤間蘭黄さん インタビュー

土曜講座の後、藤間さんにインタビューをした。

——西高生の質問にどのような印象を持ちましたか。

去年西高に来て講演した時も感じましたが、鋭い質問が多かったです。質問を受けることで、聴いている方たちがどれほど話を理解してくれたのか分かるのですが、皆さん非常によく理解してくれたのだと思いました。

——異なるジャンルとコラボする時、原典はどのように選んでいますか。

テーマは共演する人を見て決めることが多いです。今回は、原作を読んで面白いと思ったの

で選びましたが、前回公演した『信長』ではルジマトフというダンサーを見て、「この人信長に合ってるな」と思ったのが始まりです。題材があつて人がいて、その2つがうまく重なると、作品が生まれるという感じですね。

——プロジェクトシンマツピング等、現代の技術を取り入れたきっかけは何でしょうか。

きっかけは、外からやってくるんです。例えば舞台『禍神』制作のきっかけは、リストの『メフィストワルツ』への振りのオファーです。その際ゲーテの小説『ファウスト』を読み返して、この作品全てに振り付けたいと思ったんです。映像とのコラボも、ビエンナーレからのオファーがきっかけでした。他分野とコラボする時は、相手に歩み寄るのではなく、むしろお互いに自分達の1番の得意技を出し、それをぶつけ合うように心がけています。得意なことならお互いいくらでもできるから、結果的にクオリティも上がります。

——海外に講演に行つた時、日本との違いを感じますか。

大いに感じます。講演の後、質問がほとんど無いのは日本だけです。他にも、ドイツとイタリアで同じ講演をすることになった時、通訳さんとの打ち合わせで、ドイツの方は細かく語句の意味を聞いてきたのに対し、イタリアの方は大雑把に理解して終わった、ということがありました。このようなお困柄の違いはとても面白く感じます。(スツフル)

▼講座に参加した1年女子生徒へのインタビュー

——この講座に参加した動機を教えてください。

友達が日本舞踊を習っていたため、日本舞踊について興味、関心を持ったからです。

——まず、事前学習に参加した感想を教えてください。

非常に勉強になる事前学習でした。踊りだけでストーリーを作りあげている点も、まさに至高の芸だと感じました。また、蘭黄さんが扇子を使つて様々な踊りや表現を行い、それが何を表しているかを当てるコーナーがとても面白かったです。蘭黄さんの姿勢が真っ直ぐなことにも驚きました。

——次に、実際に『日本舞踊の可能性 vol.3』を鑑賞した感想を教えてください。

大変素晴らしい公演だったと思います。私は特に『禍神』に圧倒されました。オープニングではプロジェクトのようなものを使用しており、その場の雰囲気と演技に気圧されるばかりでした。また、(劇中音楽の)演奏者も場面に合わせて演奏しているところを間近に見ることができ、面白かったです。

事前学習で、投げた扇子を受け止めやすいように、扇子に重りが付いていることを教えてもらいましたが、本番では気付くことができませんでした。

——協力ありがとうございました。

(さきがけ)